『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

極大慈悲母
―他を思うこころ、仏のこころ―

佐々木　恵　精

はじめに

皆さん、こんにちは。今日は、「極大慈悲母―他を思うこころ、仏のこころ―」をテーマにお話をさせていただきます。「慈悲」という言葉についてはいろんなところでお話を聞かれていると思いますが、資料に仏典の中にある言葉を引いておりますので、それを手掛かりにしながら、この「慈悲」について一緒に考えてみたいと思います。

まず、資料の最初の項についてですが、源信和尚という、平安時代の中頃、比叡山で高僧と

して名をはせておられた方がおられます。皆さん、仏教の勉強をされていると思いますが、親鸞について勉強する中で、源信和尚は浄土教の偉大なる祖師としても挙げられます。有名なご著述として『往生要集』があります。これを書かれたのが四三～四四歳の頃です。私自身のその年齢の頃を思いますと赤面の至りですが、今の私よりはるかに若い頃にこのような大著をなされた。平安時代は、比叡山の天台、高野山の真言、という二つの大きなグループがあって、人々に仏教の教えと実践が示されていた時代です。

比叡山の偉大な僧である源信和尚がこの『往生要集』三巻を残されたわけですが、平安時代は、この書物が仏教の上でも、一般の人々にも大きな影響を与えました。この書物の中には、地獄の世界から餓鬼道、人間の世界、悟りを求めて悟りに至った仏の世界などについて仏教の経典類から関係するご文を引かれてまとめておられる。平安時代には、『地獄草紙』など、地獄や餓鬼の姿が絵巻に描かれましたが、これはこの『往生要集』が源になっているのではないかと思います。

このように、後にも大きな影響を与えたこの書物の中に、「極大慈悲母」、極めて大きなお慈悲の母、母親の心と慈悲の心が通ずるものがあるというので、「極大慈悲母」と示されている。

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

それを手掛かりにしながら、今日は、「慈悲」について考えてみたいと思います。

一　源信和尚（九四二～一〇一七。恵心僧都、横川僧都とも）

始めに、源信和尚について紹介しながら話をしたいと思います。この方のことについては、皆さんは国文学系の方は専門で勉強されているかもしれませんが、『今昔物語集』という三一巻からなる大きな説話集があります。インド、中国、日本に伝えられている、特に、仏教の心を述べる説話が集められていますが、源信和尚についても、その中に関連する話が三つくらいあります。その一つに、源信和尚のお母さんに関連した記録があります。それを紹介して、源信和尚の人間性を紹介しながら、「極大なる慈悲の母」と言われた心を考えてみたいと思います。

源信和尚という方は、お生まれが大和の国、今の奈良県であります。葛城の当麻（たいま）寺のあたりのご出身と伝えられています。お姉さんが幾人かおられたようですが、男の子はこの人だけだった。一五歳の成人になる前に出家して比叡山に登られます。比叡山に入られて、若いうちか

ら学問研究の上でも能力を発揮され、若くして高僧として認められるようになります。天台におきましては、『法華経』――仏たちの世界のすばらしさを讃えている書物ですが、この『法華経』八巻を講讃することが四日間に渡って行われる。それを「御八講（みはっこう）」と言います。法華経八巻を一巻ずつ八回に渡って（朝夕一巻ずつで四日間）講義する。しかもその当時は、天皇とか皇后とかも熱心に仏教を信奉されていましたので、こういう人たちに対してなされることがあった。そういう時には比叡山の中でも立派なお坊さんたちが八人選ばれて、一人ずつ、それぞれ一巻、一講座を担当する。

源信和尚もまだ若い頃に、「御八講」の講師に選ばれて、このときは冷泉天皇の皇后さんに講義をしました。今でも天皇に学問的なことを説明する講義の機会が持たれ、それぞれの専門の先生方が講義されるようです。この当時は、天皇たちに講義をするというのは大変なことです。源信和尚は若くしてこの立派な御八講講師の一員に選ばれて、『法華経』の一つの巻を皇后に説かれる機会を得た。そしてその後、皇室からお礼の品をいただいたわけです。『今昔物語集』の話は、そこから始まっています。源信和尚は、すばらしい、滅多にもらえるものではない下賜の品をもらって、国元、大和の国のお母さんのところにこれを送るのです。

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

比叡山の修行に入ると外の世界に下りて来ることはなかなか出来ない。今でも、仏道の心を発して比叡山で修行するお方がおられます――最近はそういう雲水になる人たちが少なくて募集している程だそうで、時代が変わったというか、情けない感じがしないでもないですね――比叡山に登ると十数年の間は山を下りることはできないわけです。私事ですが、学生たちを連れて、「座禅の会」という一泊研修で比叡山に行ったことがあります。その時に世話をして下さった三〇歳くらいの方（行者さん）が、コンコンと咳をしている。山に籠りきりで肺を悪くしているようでした。その人は関東の出身で、茨城から来ているとのことで、「比叡山に来て五、六年になるが、まだ京都という町を知らない。最近、出町柳に行ったことがあります」といわれる。京都女子大学の学生を連れて行ったんですが、「京都女子大はどこにあるんですか」と言われて「東山七条です」と答えると、「東山七条はどの辺かな」と。茨城県から比叡山に登って長く山を下りたことがないのですね。

源信和尚も山に入られて修行をされて、母親のもとへ一〇年余り帰っていない。それでお母さんのもとへ「御八講」の講師を務めたお礼の品物を手紙を添えて送ったわけです。「お母さん、こういうものをいただきました。どうぞ、使って下さい」と。お母さんから返事が来まし

て、「品物はわざわざ送ってくれたのでいただいておきましょう。だけどね、私はあなたを比叡山へ送った、出家をしてお坊さんになるように手だてをしたのは、何も名誉ある講師になるような、有名なお坊さんになってほしくて、比叡山に送ったのではない」と書いてある。「子どもたちで、あなただけが男の子だった。一人の息子を元服前に手放して、比叡山へ登って出家してお坊さんになってもらったのは、そんなためではない。本当の意味で立派な、本当の意味で仏教を究めてもらいたい。老いぼれた私のこれから先のことをぜひとも導いてもらいたいというつもりで、比叡山に入ってもらった。御八講に選ばれて、皇后の前で講義をしたと喜んでいるのでは困る」という手紙が返ってきた。

源信和尚はそれを見てびっくりしました。「私のお母さんはこんなことを書いてきた」と。皆さんは母親の心については想像する以外にないかもしれませんが、人間の性で、息子なり身内なりが偉くなって有名になると、自分まで偉くなるような気分になってうれしい。それが人情でありますが、このお母さんはそうじゃなかった。本当の道を究めてほしいという気持ち——本当の親心ですね——があった。源信和尚はそれで早速、お母さんに手紙を書いて、「ああ、お母さんの本当の気持ちを聞かせていただいた。私自身、何も偉くなったと喜んで送った

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

のではなく、いただいたものなのでお母さんに使ってもらいたいと思ったのです」と手紙を送る。それに加えて、「お母さんのおっしゃる通り、これから世間的な場に出ていくことなしに、ひたすら勉強に励みます。お母さんが、それでは会いましょうと言って下さるまでは、比叡山から下りません」と。そしてまた、お母さんから「ああ、それでこそ、私の息子だ。ぜひともしっかりと勉強して下さい。私の方から〈それではお会いしたい〉と言うまで、手紙もいらない」という返事が来ました。源信和尚は先程もらった手紙と今もらった手紙と、涙しながら読んで、経典の間に挟んで読みかえしながら、ずっと修行を続けられた。そして九年たった。実際には比叡山に登られてから二〇年以上たっていたと思われます。母親にも身内の誰にも会わずにひたすら修行し勉強していた。この方は比叡山の奥の横川といわれる、奥比叡におられた。そこで勉強を続けておられたので横川僧都と呼ばれます。お母さんと手紙のやりとりがあって、九年たって、「どうも胸騒ぎがする。お母さんから何も言ってこないが、ひょっとしてお母さんは病気じゃないか。もうご高齢である。……比叡山に入ってから二〇数年たっている。会いたいという手紙は来ないが、一度行ってみよう」と思って、源信和尚が比叡山を下りて郷里、今の奈良県まで歩いていくわけです。途中で、奈良の方から来る人と出会う。大和の国と比叡

山は一本道ですから、手紙を持って運ぶ人が奈良方面から京都へ向かってくる。そういう人に出会って、どうも気になって尋ねる。「あなた、どこへ手紙を持っていくのか」「実は、比叡山の横川まで行くのです。そこで息子さんが修行されている、その人のところへです」。「ああ、それは私だ」ということで、旅の途中で手紙を見た。お母さんの手紙だった。病気で寝込んでいるらしい母親の字で、「私が言うまで会わないと言っていたけれど、息を引き取ってしまうまでに、一度お会いしたい」と書いてあります。早速、お母さんのところへ駆けつけるんです。お母さんが、か細い声で「よう来てくれた」と再会するんですが、源信和尚は「お母さん、お念仏しておられますか」といって、お念仏、南無阿弥陀仏がどういうものであるかを説法される。母親は何度も念仏しながら、静かに声が消えるようにして亡くなられた。そういう話が『今昔物語集』の中に出ています。

源信和尚の心には、母の厳しく暖かい心を重くいただいているところがあるのではないか、それで「極大慈悲母」といわれたのだろうと思うのです。人間にはどうしても我欲がありまして、自分のことをよかれと思うことが強いものです。皆さんは物資の豊かな中で生活していて、最近の皆さんの世代の、若い方々は背が高い、すこやかに成長されている……。このように恵

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

まれた世界で生活していると、安定した心で毎日を送っておられると思いますが、それでも何かあると、自分の願いを満足したいというこころが動き、対立したり、他人をしりぞけようとしたりしたくなる。例えば、誰か困っている人がいても、ああ可哀相になと思ってもなかなか助ける気持ちにならないのが我々です。そうでなければ――すぐに近づいて手助けすることが出来れば――尊いことですが……。

それに比べると、母親の心は、我が子について言いますと、子どもが困っていたら身代わりになってでもなんとかしたい、自分が困るのはいい、我が子が何とかよくなってほしい、これが親の心です。この源信和尚のお母さんも、普通なら「御八講」の講師に選ばれて、比叡山の中でも第一人者とみなされた、名誉あることです。親として喜んで当然です。しかし「そんな浮ついた心でいいのか、本当のものを求めないといけない」と叱りつけられた。――自分と同じように子を見る――親なればこそです。

また母親は、子を思うという点で父親以上にすごいと思います、子どもが何かよくない環境の中で悪いことをした、たとえば、人殺しをして逃げまどっている、そのような子が帰ってきた時は、匿って、自分が罪を受けてでもいい、子をかくまおうとする、これが母親の心だと

いうところがあります。そのような母親の大きな心に触れて、源信和尚は「極大慈悲母」という言葉を用いられたのではないかと思います。

これが述べられているのは、『往生要集』のどこかと言いますと、仏・如来の六種の功徳、すなわちお釈迦さんのような悟りに達した如来の真実の世界、阿弥陀仏の世界、その大きな功徳を示される、六つ挙げられる中の一つとして説明されているのです。

「慈眼をもって衆生を視そなはすこと、平等にして一子のごとし。

故に我れ、極大慈悲母に帰命し礼したてまつる。」

「慈眼」というのは慈悲の眼です。「慈悲」について、後ほど詳しくみてまいりますが、一言でいうと慈しみの心、共に悲しむ心であり、深い愛情と言ってもいいでしょう。真実なるものに達した仏にはこの慈悲の心がある。あらゆる生きとし生けるものを見つめて、すべてを平等に見つめ、ただ一人の子どものようにすべてのものを見るといわれます。

仏典には「一子地」という言い方がされます。「地」というのは世界、境涯という意味で、すべてのものをただ一人の我が子のように見る世界――仏の世界です。私たちは、よその人を見た場合、その人のことをそんなに真剣には思えないものです。しかし、ともに他を思うここ

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

ろもあるはずです。記憶にも新しいと思いますが、四年前の阪神大震災の時、あの後には、困っている人たちに、全国から手助けをしようという手が差し伸べられた。韓国の新聞にも報じられたそうですが、「普通ならこういう時はパニックになって、ものを盗んだり争ったりする現象が起こりがちだが、日本では、震災で家がなくなったり、怪我をしたり、身内の人が亡くなっている人たち同士が共に助けあっている、すばらしい姿だ」と報道されたそうです。そういうすばらしいこともありました。我々も人間として共に助けあおう、困っている人がいたら、その人と同じ心になって何とかしようという気持ちが湧く面があるわけです。それが「慈悲」という心です。他の人のことを自分の一人子のように思う。これが仏典の中で「一子」と言われます。困っている人に出会ったら、わが一人子に対するように手を差し伸べようとする心が湧く。これが仏の心であるということで、源信和尚の書物にも示されている。

すなわち、だからこそ「我れ、極大慈悲母に帰命し礼したてまつる」と言われた。これはそのような働きを持たれた真実なる存在である仏――阿弥陀仏という真実の覚者を意味しています――は、慈悲の眼ですべてをみつめられてただひとりの子のように平等にみられるので、「極大慈悲母」――母親のように極大なる慈悲のお方――といわれます。それに帰命し、第一

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

の拠り所として尊崇し、礼したてまつる。「仏・如来のこころ」について、このように源信和尚は述べられたわけです。

二　慈悲

そこで、慈悲について少し詳しく見ていきたいと思います。私たちが勉強している仏教の中には、慈悲について、「四無量心」という言葉の中でお釈迦さんの頃から言われています。仏教の道を求めていくには、四無量心を自分のものとして体得しなければならない、それが悟りの根本になるといわれます。無量なる（限りない）「慈・悲・喜・捨」という四つの心です。慈悲はそのはじめ二語を付けて一つの言葉にしているわけです。

慈のもとの言葉は、maitrī（マイトゥリー）というサンスクリット語ですが、友だちという語の抽象名詞化した派生語で、友情という意味です。徹底した純粋な友情という意味で、仏教では使われています。友を思う心、他の人を思う心です。

友情といっても、純粋なこころには、なかなかなれないものです。たとえば、殺人などの事

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

件が新聞に出たりしますが、場合によっては冤罪ということがあります。罪を犯していないのに有罪であるとして裁判所で結審して獄中につながれることがある。そのような場合に、本人がいかに「そうじゃない」と言っても、信用されず、それまで友だちであった人たちまでも皆離れていく。二〇年、三〇年して冤罪が晴れて、無罪になった時には孤独なまま、社会にも受け入れられない状況におかれてしまっている。そういう時のインタビューで、「冤罪で処罰を受けた時から、無二の親友だと思っていた人たちが皆、立ち去っていった。後に残ったのはお母さんだけだった」と述懐している例があります。情けないですが、人間の世界はそういうところがあります。お互いの利害関係で「得する」ということが無意識のうちにも、思われている間は友情があるような顔をしている。しかし、一旦、おかしな関係になると冷めてしまう。本当の友情はそんなものじゃないはずです。同じ生命（いのち）あるものとして、同じ人間として相手を思いあう、本当に平等に「一子の如し」という心であれば、冤罪で有罪にされた時こそ、力になっていかなければならないわけですが、どうも人間はそうなれない。「慈」というのは本当の意味での友情です。他の人の楽しみを自分の心のようにするということともいえます。

二つ目の「悲」は、悲しいという字ですが、原語のサンスクリット語 karuṇā（カルナー）というのは、

困って、苦しくて嘆き、呻きの言葉が出ることを言います。困っている人、悲しい状態にある人、苦しい状態にある人を、自分の悲しみ、苦しみのように受け止める。そういう心だと言われます。解説書には、「慈」は他の人に楽しみを与える、「悲」は他の人の苦しみを除くとされますが、「慈」も「悲」も他の人のことを思う心、徹底して他のものを思う心には違いないので、慈悲という一語になって使われています。

「喜」というのも、他の人の安楽や喜びを得るのを見て分け隔てなく、自分のことのように喜ぶ。「捨」は、最近は無関心という訳語を使ったりしますが、捨てるというのですが、自分の方で、「これが私だ」「これがあの人だ」という枠を付け区別する心を捨てるという意味で、徹底した平等のこころです。このように、「四無量心」の中で古くから「慈」「悲」が悟りを求める者の、さらに悟りに達したブッダのこころとして、示されています。しかし、さらに「大慈悲心」が仏・如来のこころとして重視されます。そのところをみてまいりましょう。

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

三　『大智度論』の説明

次の資料に挙げましたのが、『大智度論』という書物の中に慈悲ということについて説明されいる箇所です。これによって、「慈悲」を考えてみましょう。

「慈悲心に三種あり。衆生縁と法縁と無縁となり。」

衆生とは「生きとし生けるもの」――自分のことばかりを思いながら動いている我々のことを衆生と言います。「衆生縁」とは、我々の中で我々同士が我々のことを対象にして、（縁として）起こってくる心です。二つ目は「法縁」。「法」は仏・法・僧の法です。「法に帰依する」といわれる法――真実なる教えであり、真実の法則、仏教で説かれる真実です。それを対象にして起こってくる。三つ目は「無縁」です。対象にするものがない。対象にするものなくして、自然におこってくる（慈悲の）心です。

資料のつづきをみましょう、

「凡夫人は衆生縁なり。

声聞、辟支仏および菩薩は初め衆生縁にして、後は法縁なり。」

「凡夫人」すなわち、迷いの中にある私たちのようなものが持っている心にも慈悲と言えるものがある。しかし、それは衆生縁だというのですね。法縁の慈悲は仏教のことを勉強して、声聞、辟支仏として、仏教の道を歩み、ひたすらその道を修行している人たちにあるといわれています。始めは凡夫の心と同じで「衆生縁」だが、次第に真実なるものを勉強して智慧がついてくると後は「法縁」となるというのです。

「諸仏は善く畢竟空を修行するが故に、名づけて無縁となす。」

三つ目は、「無縁」（の慈悲）です。何の縁もなしに慈悲の心がある。「諸仏は善く畢竟空を修行するが故に」というのは、真実の世界に到達した人、究極の真実、時間や空間を越えた真実に到達したもの、これが仏と言われ、如来と言われる、そういう仏たちの心が「無縁の慈悲」であると、ここに言われています。

三つに区別されて説明されますが、本当の意味での慈悲は三つ目のものだと言うことになります。同じ仏典に、小慈悲、大慈悲の二つに分けて説明されているところもありますが、私たちのように、自分のことばかり可愛いと思っている人間はどうしても、自分ばかりが可愛い、

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

自分ばかりが大事と思うようにできていますから、凡夫同士は喧嘩が起こる。それが私たちの世界です。なぜ喧嘩ばかりするのか、と新聞記事を見ても思うのですが、世界中で争いが絶えない、中近東での対立でも、平和を求めて協定が結ばれたと思ったらまた、それに反対して爆弾テロが起こったりする。それが千年、二千年と続いているのです。日本の中でもそうです。我々の近くでもそうです。日本では鉄砲持って撃ち合うことはめったにないにしても、自分のことばかりが大事で、人のことはどうでもいいというところから争い、殺しなどがおこる、そのような記事が多いですね。それでも仏の慈悲に近い、いつくしみのこころもある。それを「衆生縁の慈悲」といわれる。

その例として、一番身近な例で、小さい時からよく言われるのは、乗物で席をゆずりあう例です。電車に乗ると、お年寄りが来られたら席を代わろうねと言われる。その意図からシルバーシートが作られた。――私も凡夫の中のへそ曲がりな男ですので、こんなもの作ること自体がおかしいと思うのですが。――乗り物に乗って座っている時に、ご年配の方が乗って来られた。このようなとき、内心、代わってあげなくちゃという思いが自然に起こってくるものです。だけど、席をゆずりたくないという曲がった気持ちも同じ心のうちにあるんですね。「折

角、座ったのに、これから一、二時間乗らないといけないのに、こんなところに立たないでほしい」と思う気持ちがおこる。私は京都まで一時間あまりＪＲで乗って来ます。たとえば、今朝は九時から用事があったので、六時前から起きて、まだ暗いうちに家を出て眠たい。「電車で座らないと……」と思う。

人間の「慈悲」のこころとは、衆生同士、人々同士の間で起こる心はそんなものです。プレゼントをする例でもそうです。例えば、誕生日のお祝い。友だちの誕生日に、「何をお祝いにしよう。こんな品物だったら喜ぶだろう」と、いろいろ考えてプレゼントする。ところが、パーティに持っていって、その友達から「それ、昨日、〇〇さんにもらったわ」と言われると「もうあげないわ」と思う。我々の心はそんなものです。対象に応じて、情況によって心が変わる。そういうのは、衆生縁の慈悲で、まだ小さいものだというわけです。

法縁の慈悲は、「仏法は無我にて候」と言いますが、「自分に執着してはいけない」「すべては無我である」といわれる仏教の真実なるあり方を前提にして、そこから起こってくる心、共に同じ人間同士であるという心を持って助け合わねば、という、そういう心が法縁の慈悲です。

それで十分のようですが、まだそれでもだめだということで、最後に無縁の慈悲。真実に到

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

達した、そういう最高の智慧の眼からすれば、今この人が困っているから、この人に手助けしようというような、相手を推し量ってそれに対する心を動かすのではない、何の条件もない。——無縁というのは、無蓋の大悲ともいわれる、蓋がない、宇宙へ広がっている、無限の心ということです。真実なるものの心はそういうものである。それが本当の慈悲であるということが、『大智度論』には説明されているわけです。子どもに対する母親の心はこれに近い。男性も、女性も人間として命をいただいている一人ひとりという意味では平等でありますが、どうも心の面ではだいぶちがうようです。女性の心の方が、慈悲という観点からすると、私のような男の心より純粋性の点から優れているように感じます。皆さんには、そういう心があるわけですから、ここで言う「極大慈悲母」の心を思いながら慈悲の心を培ってもらいたいと思います。

それについて例をあげてみましょう。以前に聞いたことがあるものですが、アメリカで実際にあった話です。第二次世界大戦より前の話ですが、アメリカ大陸に移住した日系人がいます。現在では、それが第二、第三、第四世になっています。日本語を知らない世代になっていますが、第一世の頃の話です。日本人の若いお母さんが、子どもを家において農作業をしていた時

の事件です。小さい子どもを家に置いて畑に出ていた。その時、子どもが、熱いお湯の入ったヤカンを引っ繰り返した。お湯がかかって熱い、痛いので「ギャーッ」と泣き叫んだ。お母さんは、その声を聞いて飛んで帰った。ヤカンが引っ繰り返っている。びっくりして「大変だ、何とかしないと……」と思い、――携帯電話も電話もない。日本の村と違って隣の家も遠い。――お母さんは昔から「火傷には肉がいい」と聞いていたので、それで思い余って、自分の腿などの皮をはいで自分の肉を我が子の火傷のところに張りつけていったというのです。近所の人たちがかけつけてくるわけですが、その時には、お母さんは出血が大変で意識朦朧だった。救助隊の人たちは、何が起こったのかと不審に思ったといいます。親子が血みどろになっている。「母親が心中しようと思ったのではないか」と最初は思ったそうです。その子どもが幸い物心ついていたので、子どもの説明でようやくどういうことが起こったかがわかったということです。翌日の新聞に、その記事が出たそうです。「日本人のすごい母親」ということで、親心のすごさを絶賛する記事でした。子どもは火傷の跡は残りましたが、一命を取り止めた。お母さんは出血多量で息を引き取られたそうです。

極端な話ですが、母親の心はこのように我が子に対して同体に働く。源信和尚が、まさに

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

「平等にして一子の如し」と言われた、その「一子」の心であります。「一子」というのはわがひとりごのように見るということで、自分と同じに見る心です。

べつな事例ですが、つい最近、肺移植の話があって、患者さんのお母さんと妹さんの肺をそれぞれ一部いただいて肺を再生されましたね。自分の臓器を託して、自分の子を、自分のお姉さんを救おうとする――子と親が一つになっている心です。私のような父親だったらそこまでできないのではないかと、私自身を振り返って、男親は冷たいなと思っています。

しかし人間の心は、母親が我が子に対する場合はそうですが、現実に、すべての人に対してはそうなりえない、ここに人間の限界があります。たとえば、赤ちゃんができると、その子どもを通して親同士が友だちになっていく。幼稚園に行き、お母さん同士のサークルができたりします。同じ年頃の子どもを持つ母親が和気あいあいとなごやかな輪をつくる。すばらしいことですが、しかし厳しく心の中身を見ていきますと、「自分の子どもは可愛い」と思うのが我々の世界です。隣の子については、「やんちゃな子、可愛くない……」などと思ってしまうものです。確かに、純粋無垢で分け隔てのない姿が子どもには現れていますから、子どもは可愛いのですが、我が子が一番可愛いのも人情です。その辺に人間の限界があるわけですが、先

程の例のように、母親の愛情は大慈悲につながる純粋性があると思います。

源信和尚は、わがお母さんに育てられた。比叡山にいても、手紙によって育てられた。――その、母親の偉大なる心を受け止めておられる。仏の心――大慈悲の心――を「極大慈悲母」とおっしゃられているのも、そのようなところからだと窺うことができます。

四　『ウダーナ・ヴァルガ』

『ウダーナ・ヴァルガ』という書物があります。サンスクリット、パーリー語で残っている古い歌が集められたものの一つですが、その中に次のような有名な歌があります。

人はすべて暴力におびえ恐れる。
いかなるものにとっても自らの生命（いのち）は愛しい。
それゆえに我が身にひきあてて
他の生命を殺してはならない、殺さしめてもならない。

私たちは自分を中心に考え、自分をいとしく思うものでありますが、他の人たちも皆同じよ

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

うに生命（いのち）を与えられて存在している。そういう意味で、すべてが尊い。人間として生きていることそのものが不思議なことです。そう簡単に人間に生まれることもできない。そもそも命が与えられることそのものが万に一つ、可能性としては稀なことであると言われます。科学的にもそうです。そういう尊い命を受けている、お互いにそういう存在です。その中で自分を振り返ると、自分の命はその意味でも愛しい。自分だけを愛しく思っていると、気に入らないものを排除したり、他に暴力をふるったり……となりがちですが、その自分と同じように他のものも皆、命あるものである。それに暴力を加えることは、自分が暴力を加えられる場合と同じように、おびえ恐れるものである。そのように、自と他を同じように見ながら、自他平等の世界を見ながら、他の命あるものも自分と同じように尊んでいかなければならないという歌です。ここには、深い心が示されている。慈悲というのは、こういう心をいう、自・他を同じように見つめる心ともいえます。

私たちはどうしても、「我が身の命は愛しい」だけに止まりがちであります。もう一歩、広く、他の人の心、他の人の存在を思い、他の生きとし生けるものを我が身と同じように見つめる心が大事なのではないかと思います。仏教は二千数百年の歴史を持ち、その中で、インドで

も哲学、思想の面で他と論争したり、仏教内部で議論したりして揉まれてきています。そのような中で難しい議論や思想体系が残されています。この大学で仏教を勉強される中でも、難しい話を聞かれることもありましょう。しかし、仏教の本質を一言で言えば、他を思う心、それは人間だけでなく、あらゆる生きとし生きるもの、宇宙にあるすべての存在を「我が身に引き当てて見つめていく」ということです。そこに仏教の心の根本があるのではないかと思います。まさに、「極大なる慈悲の母」のような仏のこころであるといえます。

おわりに―『歎異抄』第四条から―

資料に、『歎異抄』の言葉を挙げておきました。一言だけ申しますと、『歎異抄』は親鸞が示して下さった言葉で、お弟子の唯円坊が直接に聞かれたことが記述されている。親鸞が亡くなられてから二〇数年して、親鸞の教えと違うことを言い張る者が出てきた。直接、師匠の親鸞聖人からお聞きした言葉に基づいて、「それは間違っているよ、お師匠さんはこうおっしゃっていました」と具体的な事例を挙げながらまとめておられる、小さな書物です。

『真實心』第二十集平成10年度1999年3月発行（京都光華女子大学）

その中の第四条は、慈悲について述べられています。本文は、

「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。

聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。

浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもって、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。

しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきなりと云々。」

我々は、慈悲ということを、慈悲の手を差し延べることに、できる限り努力しないといけないわけですが、例えば、阪神の大震災の時、困っている者同士が一緒になって助けあおうとした。全国から助けようと手を差し伸べられた。そのような、共に助けあおうという心は大事です。人間としてそうさせざるをえない気持ちが内にある。大事にしていかないといけない。しかし、それを徹底して行こう、と思っても、「無蓋の大悲」とはなりえないのが我々の情けないところです。親鸞は自己を振り返って、どうも自分勝手な、煩悩だらけの、凡夫のことをばか

りあてにするこころが蠢（うごめ）いている。親鸞はそこを厳しく見つめられた人です。慈悲の心を持つというのは大事ですが、我が身の方の慈悲は「衆生縁」です。小さな慈悲しかできない。それより真実に到達した心をいただく、如来の慈悲の心「大慈悲心」をいただくことが大事であると述べられている一節です。

慈悲ということを、源信和尚の言葉、あるいは『ウダーナ・ヴァルガ』の言葉を心に止めながら、親鸞の言葉を思い出していただけたらと思います。また、源信和尚の母を想うお話なども思い起こして、仏の世界を「極大慈悲母」と述べておられる心を少しでも皆さんの心のうちに止めていただけたらと思います。

どうもありがとうございました。

――一九九九・一・一三――